

---

# 光と闇のハザマ ~ Faulty Person ~

白波の使徒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光と闇のハザマ〜Faulty Person〜

### 【Nコード】

N8739E

### 【作者名】

白波の使徒

### 【あらすじ】

少年は、感情が壊れていました。友達の四肢がばらばらに切断されていたのを見た時だって、何も感じず、死体を見たという気持ち悪さだけ感じました。そんな彼を慕う、一人の幼馴染な少女。彼女は感情表現が露骨で、彼女は自分の感情を素直に彼に言います。しかし彼は、何も思えません。良心の呵責。そして彼は壊れていきます。そんな中、町では連続通り魔が勃発し、犯人とうっかりコンタクトしてしまい、殺人宣告をされます。彼の胸には、何かが渦巻いているようです、それは

## 上 闇の開闢

「ねえ、ミッチー。人を殺すことって、いけないことだと思う?」  
路傍、美渚凧が僕に言った。

「絶対にいけないことだと思うよ」

僕は即座に否定した。

「即答だね。でも、うん。一般人に聞けばそういう答えが返ってくるのが当たり前だけど、それがミッチーの口からも聞けるとは思わなかったな」

「確かに、僕は普通じゃないよ。君ほどじゃないけどね」

「ふふ、何を言っているの? あなたも私も同類なのに」

「同類って言うな」

「あら、まさにその言葉がぴったり来ると思っただけど」

「まあ、ね」

僕は素直にそういう。凧は笑う。

「あなたのそういうところは、魅力の内に入ると思うわ。素直って、いいことだもの」

僕がそうだとは思わないけどね。

「ええ、そうかもね」

こやつ。

ふふ、と彼女は笑った。

「でも、あなたのそういうとこ、嫌いじゃないわ。殺すのが惜しいくらい」

ああ、あれは空耳じゃなかったんだ。

「そうよ。れっきとした宣言、約束。……いいえ、契約、かしらね。とにかく、十三人目に、あなたを殺す。これは私の中では、もう規定事項なんですから」

そうか、と僕は人事のように口元をゆがめた。その顔は、他人から見ると、多分、笑顔に見えるんだろう。

僕は、ミッチーだとか、みーちゃんだとかみーだとかいろんなあだ名があるけど、そんなことはどうでもいい。彼女は、その名を美渚凧という。名前こそ美しいものの、顔も綺麗だけどね、ずばり、連続通り魔事件と銘打たれた連続殺人事件の犯人、すなわち殺人鬼である。

何も、僕がそれを知らずにこうして歩いているわけではなく、それを痛いほどに了解している。

交わされた約束は、昔の罪と同じように消えないものであって。全ては、あの夜に。

.....

七月十三日、金曜日。キリスト教徒どころかカトリックとプロテスタントの違いもわからない僕にとつて、その日は十五日の日曜日と同じくらい無意味な日だ。つまりは平日と同じ扱い。それに、その日が十三日の金曜日だと知ったのも、あれから少ししてからだ。

その日の真夜中、二時ごろ。

あまりの熱帯夜に、僕は散歩を決意した。

夜、あまりに満月が綺麗な中、僕は外に出た。

なんてことはない、ただの気まぐれだ。

生ぬるい風を受けつつ、しばらく、気持ちに任せてぶらぶらしていた。

と。

背筋が、

凍った。

脊髄に液体窒素をぶち込まれたような、日常の中に消えていった悪寒。

まずい。

この類の寒気は、

必ずといっていいほど、悪い思い出とともに記憶に刻まれていた。

僕が、はたと足を止めた。

その誰かも、足を止めた。

僕が歩く。

気配も歩く。

僕が止まる。

気配も止まる。

僕はわざと大きくため息をついた。

これはあれか。流行の通り魔ってやつか。まさか自分が被害者になるとは思ってもいなかった。圧倒的多数の人間に群れることによつて失う危機感。それを僕は久しぶりに味わっていた。

僕は一つ深呼吸をし、手を大きく上げ、静止の合図を出した。殺気立った気配が、ぴたりと止まる。

そして、手だけをクイクイ、と曲げた。着いて来い、の意思表示である。

彼、ないし彼女は了解していたようで、ナイフを鞘に戻す音が聞こえた。

ここでは、周囲に人目がある。

どこか、人がいないところがいい。

僕はそこに、川原の河川敷を選んだ。殺人としては絶好の場所。なるべく人通りの少ない道を選び、そして目的地、橋の下までやってきた。

ここで、初めて僕は後ろを振り返った。

そこに、何かが立っていたのは見えただけで、姿かたちまではわからなかった。

「あなた、慌てないのね」

凜とした声が聞こえた。女だ。体も小柄。こんな人が犯人だなんて、僕には、少しばかり意外だ。

「今まで幾度となくこういうことはやってきたけれど、こんな反応をしたのは、あなたが初めて。……つまらない」

「それは、たぶん他の人は正常者だったんだろうね」

「そうに違いないわ。あなたはどこかおかしいもの」

「かもね」

「……一つ、聞かせて」

「なに」

「もしかして、あなたは現状を理解していないのかしら？」

「してるとも。これで悟らないやつはただの馬鹿だ。」

「そう、じゃあ、なんであなたは、ここを選んだの？」

「それはつまり、なんでわざわざこんな人気のないところを選んだか、と言うことか。そんなの、簡単だ。」

「ここなら、迷惑かからないからね」

「それは、どういう意味？」

「そのままの意味さ。僕の死体が路傍に転がっているなんて、気分悪いじゃないか」

「それは、多分本音だった。」

「……そう。じゃあ、もう一つ」

「一つじゃなかったっけ」

「もう一つ聞かせて。なんで、今、あなたはそうやって平然としていられるの」

「なんでだろうね。」

「それさえもが本音であつた。そんなときでさえ、僕は無感情であつた。」

「……あなた、名前は？」

「ミッチーって呼んでくれ」

「……あなた、本当に変わってるわね」

「君に言われたくないよ。……君は？」

「私は、美渚風」

彼女は、見惚れてしまいそうな雅さで、大きなナイフを取り出した。

「ミッチー、か。多分、あなたのことは一生忘れないでしょうね」  
「そうか。」

「じゃあ、ほんの一時だったけど、楽しかった。じゃあ」  
サヨナラ。そんな声が届いたか、届かないかの間に、美渚風は、僕との距離を零にした。

「！」

早い。僕は思い切って横へ跳んだ。数瞬遅れて、彼女のナイフが、僕の首筋があつたところを一閃する。

「へえ」

彼女は、僕を見た。

「早いね」

「……君にほめられたくはないね」

「そう」

彼女はもう一度、ナイフを構えて突進を敢行した。  
もう一度横跳び。しかし、何度も引つかかるような彼女ではなかった。彼女は横薙ぎした。

「お」

すんでのところでかわす。

そして、彼女の乱舞が始まった。

僕に、ナイフでの乱れ突きを繰り返す。

それを、僕はかわし続ける。でも、僕は武道の達人でもなんでもない、素人だ。前の二回は、断言しよう。偶然だ。

僕はやがてバランスを崩し、地面に仰向けに転ぶ。

好機、とばかりに彼女はナイフを突き出し、刹那。

『……』

時が、止まった。

お互い、ぴくりとも動かない。いや、違う。お互いによって、お互いが動けない状態にされていた。

彼女のナイフは、僕の頸動脈の、薄い皮膚を破る一歩手前で止まっている。

僕の指が、彼女の目の前で止まっている。彼女の目は、見開かれていた。

今の彼女なら、皮膚を貫き頸動脈の流れを絶つことなどたやすいことだ。だが、その時間は、僕が指を彼女の目の中に入れ、二度と光を見られないようにするには十分すぎる時だ。

僕の命と、彼女の目玉、二個。重みは歴然としているが、僕にとってはどちらにせよどうでもいいものだ。ただ、せめてもの死への抵抗活動として目潰しくらいはしてやろうじゃないか。

「ふふ」

彼女は笑って。ナイフを投げ捨てた。僕も、指を引っ込める。

「引き分け、ね」

彼女は笑うように言った。

僕は荒い息を整えるのに必死だったが、彼女は平然としている。

「あーあ、仕留めそこなっちゃったな」

本当に、つまらなそうにそう言うのみであった。

「うん。私、君のこと気に入ったわ、ミッチー」

冗談ともつかぬ事を言い、彼女はくるりと背を向け、暗闇に消えて行った。

「お……おい」

僕は虚空にそう言った。

ただ月だけが生きているような、塗り固められた闇の中。僕はそこに一人で立っていた。

いつか、あなたのことを殺してみせる  
そんな声が聞こえた。

これが、僕と、美渚凧との出会いであった。

.....



殺人鬼は続ける。

「でも、ね。人を殺すことって、案外簡単なのよ」

「そんな知識が実証されることがないといいけど」

「そうね。あなたの場合は。私は、もうだめ。血の匂いに、憑かれてしまったもの」

そう囁き、彼女は雅な動きで指を動かした。殺人鬼ってのはみんなそういうものなのかな。

「それって私のこと？」

「そうかもね」

「失礼ね。私は殺人鬼じゃありません」

「人を八人も殺しといて、今更何を言う」

「殺人鬼って言うのは、ほら、すなわち殺人快楽者、殺人嗜好家のことでしょう？」

凧は違うのか。

「違いますとも。私は、殺すことに何も感じません」

「じゃあなんで殺す。自分と同じ人間を。」

「なんです。人間として最も禁忌の極みに入るものを。」

「あら、今、禁忌の極みって言った？それは殺人じゃなくてよ？」  
「そうなんだ。」

「じゃあ何？」

「自殺。それが、人間として……いえ、生き物として一番してはいけないことなの」

断定か。

「そうよ。……あのね、自殺の定義って知ってる？」

自分で自分の命を絶つことだろ？

「まあね。あと、人間は生まれながらにして罪を背負ってるって話、聞いたことある？」

キリスト教か。

「そんなのあった？まあいいわ、とにかく、人間ってのは存在自体

が罪なの」

つまりは人類みんな死ねと？

「それじゃ意味ないの。そしたら、背負っていた罪はどうなるの？その罪を背負った自らの結末を見ないで、いなくなっちゃうんじゃない？あその罪は永遠に消えないものでしょう？ほら、ここで自殺のもう一つの意味が見えてくる」

「意味、とは？」

「一言で言うと、『逃避』でしょう。自らの罪からの、贖罪からの逃避。返すべきものを返さないで、死んでしまっただなんて、それこそ最高の罪だわ」

じゃあ殺人とは？

「そんなのまだまだ可愛いものよ。人の命を絶つんでしょう？そりゃあ、その人の罪の返上を不可能なものにするわけだし、未来への扉を閉ざすことになるのだから、悪いことよ。でもね。殺人って、することですぐ背負う罪があるわけよ」

「殺人罪じゃなくて？」

「ちがうの。そんなものじゃなくて。あのね。要するに、殺人ってのはその人の罪も一緒に背負うことになるの」

僕は反論を試みる。

「でもさ、そんなのは罰にはなっていないじゃないか。そんな罪は、ただの空虚な妄想だと考える人のほうがむしろ多いはずだ。そういう人にとって、そんなものはずんぜん大した事ではないはずだよ」「罰と罪は違うわよ。その罪で背負う罰は、そう、罪悪感。これが究極的な罰かしらね」

「それだって、何も感じない人もいる」

「そんな人はいないわよ。多かれ少なかれ、誰もが罪悪感というものは持つもの。それは、今後の自分の行動を妨げたり、立ちほだかつたりするわけ。贖罪の労力が増える、ただそれだけの話よ」

「じゃあさ、贖罪ってのは究極的にどういうこと？」

「そんなの簡単よ。死ぬこと」

矛盾だ。

「ちがうの。これは、天寿を全うする、ってこと。苦しんで、苦しんで生き抜いた末に、自らの人生を省みて、自分の全ての結末を受け入れる。これが、完全な贖罪よ」

「つまり、自殺ってのは罪を途中で投げ出してしまふことか」

「そういうこと」

「じゃあさ、例えばいじめにあつたとしよう。それがどうしようもなく辛いものであつて、逃げる術もない、苦しんで苦しみぬいた末に自殺を選択した人がいた場合はどうなるんだ？」

彼女は言う。

「どうだろう。例えば、誰かがインフルエンザの一億倍くらいの感染力と、最強の致死性を誇る病気にかかったとしよう。その人が生きているだけで、周りの人々は死ぬ。もしそんな状況に陥ったら、普通の人は、まず間違ひなく死を選ぶ。周りから見れば、それは英雄的なものと評価されるだろう。でも、それはやはり精神が弱いからなんだ。死ぬほうが、生きるより千倍楽なものね。でも、やはりどんな状況に陥っても、生きて生きて、それで自らの結末を受け入れるべきなの」

なるほどな。

「なんとなく、分かった気がしたよ」

「そう、よかった」

彼女は、そして微笑む。この笑みが、凄惨なものになるところは、あまり想像したくない。

ふと視線を前にやると、そこはもう僕の目的地、高級住宅街の一角を占めるマンションであつた。

「じゃあ、僕はここらで」

「そう、じゃあ、バイ」

そう言つて、彼女は背を向けて歩き出す。歩き出したはずなのに、そこにはもう何もなかった。

「ふっ」

僕はため息をつき、本来の目的を果たすことにした。そう、もともとあんな殺人鬼 凧と話す予定はなかったのだ。ばったり、偶然出会ってしまったばかりに、ああしてくつわを並べていただけだ。

そんな言い訳をしつつ加賀峰凧のマンションの、カメラ機能付チャイムを押す。

ピンポン、と流れるような電子音が聞こえ、程なくして返答が帰ってくる。

「はい、あ、みーちゃん？待って、今開けるー」

僕に一言も発する暇も与えずぶちり、とチャイムの切れる音がし、カシャン、とオートドアが開いた。ここら高級住宅ではこれが当たり前だそうだけど、玄関の時点ですでに我々庶民との違いを見せつけられてしまい、どうしても、僕はこの地に足を踏み入れるのを躊躇してしまう。

さて、僕がなぜこんなところにいるのか。理由は簡単。クラスメイ卜、数少ない友人の一人である加賀峰凧が、ここ一ヶ月間学校に姿を現さないのだ。よって、この手にぶら下げたハーゲンダッツ（ストロベリー）からも推測できるであろう、いわゆるお見舞いつてやつに参上仕ったわけだ。……溶けてないといいけど。

僕がエレベーターの超高速上移動に頭をくらくらさせつつ、最上階を告げるアナウンスに促され、僕はエレベーターを出、すぐ真向かいの、加賀峰凧の家のドアへと歩み寄った。

ここでもチャイム。3秒ほどの間の後、ドアが勢いよく開く。おかげで、チャイムを押した後、自然とドアから遠ざかる習性がついてしまった。

「やーみーちゃん！おはよー」

相変わらず、こんなに暑いというのに黒いコートを着て、マックススマイル、マックスステンションで加賀峰凧が姿を現した。太陽が傾きかけているこの時間におはよう、というのはこいつとつるんでいればそう抵抗を感じることはなくなる。

「ん、さては寝てたね」

彼女の挨拶は、彼女が起きてからどのくらい時がたったのかに反映される。おきて三時間経つ前は「おはよー」で、それ以上は「こんちわー」、さらに六時間が経つと「こんばんわー」である。こいつは変なところで几帳面なのだ。寝癖も治さない、几帳面。うん、貴重かも。

「ううん、大丈夫、もう起き掛けてたから」

「そうだ、はいこれ、冷蔵庫」

そう言つてビニール袋を手渡す。

「わー、なにこれー。うおー、ストロベリー！」なんて声を尻目に、僕は部屋へお邪魔した。お邪魔しますを言わないのは両者間の暗黙の了解だ。

僕が凜の私室に入り、彼女が遅れて入ってくると、ふとその目の片隅に怪しいオーラがむんむんする板状の物が入ってきた。

「なにそれ」

「ウィジャ盤」

即答。つて。……はい？

「シーカー朝のころかな」

とまで駄目押しをくれた。

「……シーカー朝つて初めて聞いたけど」

「えー、みーちゃんちゃんと授業受けてるー？言つてたじゃん、センセー。」

「記憶にないな」

これは後日談だが、こんなのは全国トップの大学の世界史で名前だけ出てくるような、そんなマニアックな王朝であった。貧弱大学に通う僕らには無縁な話であり、やはり先生はそんなこと言つてはいなかった。

「うにー、まあいいや」

そういつてにへらつと笑う。言うまでもないが、この天然少女は名前を加賀峰凜という。黙つていれば普通に可愛い奴なのだ。が、あまりのハイテンションに、美人ポイントは激減の目を見ている。ま

あ、それはそれでまた違う趣があるけど。ちなみに、僕と同じ大学に通う学生である。とてもそう見えないのは何もその体の小柄さだけではあるまい。いつも楽しそうにしているが、彼女は決して幸せというわけではなかった。それ以外の感情を知らないのかもしれないと思ひ始めたのは最近のことだ。

それは別に家が貧しいというわけではない。むしろ彼女はものすごくお金持ちだ。

ただ、両親、親族、その他がいなくていいだけで。

彼女の両親は情報機器なんかですごい発明をしたらしく、現在進行形で、ものすごい量のお金が入ってくるため、彼女は一生働かなくてもすむだろう。三十回の人生を遊んで暮らしてなおお釣りが来る様な、僕ら庶民には思ひもしない大金であることは確かだ。

しかし両親は交通事故で、意図的なものな 死んだという。そのあたり、僕とは似ているため、こうしてつるんでいるのかもしれない……いや、そんなのは逃げ口上だ。ただ、僕は、何も隠さず開けっぴろげに感情表現できる彼女がうらやましいだけなのかもしれないなかった。

話を戻そう。僕の両親は、通り魔によって惨殺された。九歳のときだったか。そして僕はおじの家に引き取られたが、そのおじも僕僕が十五歳くらいのときに事業に失敗し、多額の借金を背負って自殺してしまった。当然、返済の義務は僕に帰結し、払いきれないような額のお金を要求された。それを肩代わりしてくれたのが、他ならぬ加賀峰凜である。当時のクラスメイトで、僕の数少ない友人の一人であつた彼女であつたが、暗い顔をしているところを巧妙に嗅ぎ取られ、僕から全てを聞き出すと『よっしゃ、じゃあ私が肩代わりしたげる！』なんて言い放つた彼女でもある。……いや、そんなことはどうでもいいのだ。

僕は小さいころから、人よりずっと多い人の死に立ち会ってきた。合計すれば、間違いなく五は下るまい。僕の記憶力の悪さには定評があるので、正確な数はわからないけど。

……何か、感じなかったかつて？

・ ・ ・ ・ ・

何も、感じなかったさ。

なぜか、なんてわからない。ただ、両親が通り魔に惨殺されたと聞いたときも、おじの自殺を聞いたときも、友達の家に遊びに言ったらその友達が両手足をばらばらに切断されたのを目にしたときも、涙ひとつ、嗚咽ひとつ漏らさなかった。漏らせなかった。

ただ、死体を見たという気持ち悪さだけ。

何よりも気持ち悪いのは自分自身だというのに。

現実だと認識できなかったわけではなく、むしろ葬式場に集まっていた誰よりも、現実をしっかりと捕らえていたと思う。

ただ、本当に、本当に何も感じえなかったのだ。

今も現に、ほら。僕はこんなことを思い出しつつも、なんとも思っていない。

ぼくは、無痛症の精神バージョン、いわば無感症なのかもしれないと思い始めたのはそう最近のことではない。

「欠陥人間」。造語、by僕。

何をしようが、何をされようが、どんな精神的感情も巻き起こらない。自発的な感情さえもが稀少で、滅多にそういうものは現れず。

愛というものなんて、この世の中に存在する超能力者と同数、すなわち。ゼロに近い。

だから、僕は人に好意を抱く以上に抱かれるほうが苦手である。

その好意が重ければ重いほど、僕は困惑する。

その好意に、応えられる感情がないから。

そして、良心の呵責。しかし僕の心は無反応。

そして、今僕は、この純粹で天然な少女に対して、何を思っているのだろうか？

何を抱いているのだろうか？

理解できる日は、いつか来るだろう。

その感情が、どんなものであるとしても

「うん？どした？みー」

「……なんでもないよ」

そか、と彼女はウィジャ盤をいじるのを止め、相変わらずの笑顔で僕に話題を振った。もう飽きたらしい。

呪われた日本刀から、月の石まで収集してしまう彼女のことだ、これもお蔵行きか、骨董店行きか。愛撫するだけしたら、次のものへ移り、それは買値よりも高い値段で売るのが加賀峰凜流だという。

「だつてさ。知ってる？……というか聞いている？みーちゃん」

「……あ、ゴメン、完膚なきまでに完全に超絶的に聞いてなかった」  
「え？全くみーちゃんは。いいかい？もっかい言うよ？」

凜は少し息を吸い込んでから言った。

「だからね、……通り魔、だつてさ」

「通り魔？」

「うん」

彼女はゴロリと寝転がった。

「もう八名様が仏様になつてゐるそうだよ？こりゃあもう大事件さ！こいつはかわいらしい外見の癖に案外こういう話題を振ってくることが多い。それはつまり今の世の中にはそういった事件が多発している、ということだ。こいつはまた、ヒキコモリなくせして世界情勢には人三倍くらい詳しい。

「八人つてすごい数なの？」

当たり前だよ！とスーパーハイテンションの突っ込みが飛んできた。

「確か、三人までが殺人で、そっからはもー殺戮だよ」

初耳だ。

「だろうね！私の持論だもん」

即興の、と彼女は付け足した。

「それに、八人も殺したつてのにまだ何も手がかりないんだつてね？」

へえ。それで、一週間で閉じこもって調査してたつてわけか？

「へへ、そうだよ。」



彼女はペロンと舌を出した。あくまで趣味の延長なはずなのに、よくやることだ。

「みーちゃんも手伝ってよ。一人よりは二人のほうがいいはずさ」そのファンシーな表情が一瞬にしてシリアススパイスを含む。こいつの表情は忙しく変わる。

「でも、こうなるともう国も動かざるをえないだろうね。五人だよ？それに、まだまだ増えそうだし。私の予想だと十三人は殺されるんじゃないかな？なんて思っているんだけどね」

「国まで動くの？こんな地方的な県に？」

「地方的な県だからだよ」

加賀峰凜は、ウィジャ盤を脇に押しやって、大きな瞳で僕を睨み通すように言った。

「こんな事件は、絶対に地方的な県で起こっちゃあいけない事件なんだ」

「……。」

「でも、何だろうね。今までの殺人鬼と比べると、なんか殺人衝動ゆえの殺人ではないような気がするんだよ」

「どういう風に？」

「頸動脈切断。みんなそれが致命傷で殺されている。比較的苦しめない、スマートな殺し方だね。それに、みんなまぶたが閉じられている。こたわりがあるっていうか」

「でもまあ、だいぶ猟奇的だな」

「うん」

彼女は肯定した。

「だから、みーちゃんも気をつけてね。大好きみーちゃんが冷たくなってますよ、なんて聞いたら私、泣くからね。テレビカメラの前でいい人でした、なんて言いたくないよ」

彼女はいつになく真摯に言った。

「…わかったよ」

僕はそう応えるしかなかった。

それから、極めて普遍的な会話に花を咲かせた。今ここに一億円が落ちてたらどうするとか（凜は交番へ届ける、と言った）、今まさに、地球に超巨大隕石衝突する十五分前だったらどうするとか、とにかく、そんな他愛もない話だ。

「よし、じゃあ僕はもうそろそろお暇することにしようかな」

僕がそういったのは、太陽はもう沈み、外は暗くなってからだった。

「あー、もう？もつとゆっくりしていきなよ」

「もうそろそろ帰らないと、ほら、通り魔」

「みーちゃん言い訳。通り魔は昼夜問わず営業中だって言ったじゃん」

そうだったつけ。

「そーそー、だから今日はここに泊まっていきなさい」

だからって、話が飛躍しすぎだと思う。

「うーん、何も用意してないし」

「うん、そうだね」

あっさり彼女はあきらめると、続けて心配そうに言葉を紡ぎだした。

「気をつけてね」

「ああ、大丈夫、いざとなったら必殺サマーソルトがあるから」

「別名山突、だね」

そうそう、と僕は乾いた笑いをこぼした。

「じゃあ、家に着いたら、すぐにかがりんの家に電話すること。三秒以内ね」

「そんな、ガキじゃあるまいし」

「だーめ、私から見たらガキなの。心配で夜も眠れなくなっちゃう凜にガキ扱いされるとは心外だ。後、まだ寝るのか。」

「良い子は育つんだよ」

寝る子だろ。

「うにー、そんなのどーでもいいでしょ。さー帰った帰った」

どっちなんだ。

「そりゃあ帰らないでほしいけどさ。でも帰らないといけないなら、

早く帰らないと」

こいつの言葉は矛盾だらけだ。

「了解」

僕はそう言い、凜の私室を後にした。

「ああ、電気消さないでね」

「わかってるよ」

こいつは、暗いところがだめなのだ。前に一度、こいつの家にいるときに停電になったことがあった。そのときはもう、大変だった。何言ってるかわからないし、子猫をとられた親猫みたいに暴れまわるし。しかも、電気がついたころには半泣きだから何もいえないし。そんなことを考えつつ、後ろで手を振っている気配を察知したので僕も後ろながら手を振る。

廊下を抜け（僕はこの空間を廊下と呼ぶことにいささか抵抗を感じる。この時点で、僕の部屋より広いからだ）、ドアに手をかけると、後にしたばかりの部屋から声が飛んできた。

「あ、そうだ。みーりゃん、これ」

凜は僕にいくつあだ名をつければ気が済むのだろう、と心中で思っている、いきなり視界に前方後円墳形の金属が入ってきた。

「うわ」

かろうじてナイスキャッチ。

「これは？」

「うちの鍵ー」

「どうしろと？」

「閉めるのめんどいから閉めといてー」

その後この鍵はどうするんだ。

「あげるー」

なんて声が響いてくる。

「……ええ？」

いいの？

「いーのいーのー。スぺアだしー」

その声に続いて、にゅいつと手が伸びてきた。

「でも、代わりにみーちんの部屋の鍵もちよーだいねー」  
ええと、それはつまり？

「もー、鈍いなー」

彼女はひよつこりと顔だけを出した。

「カレシとカノジヨの間の鍵交換なんてジョーシキだよ、ジョーシキー」

そう、恥じらいもなくあっけからんと言いつつ彼女であつた。

輝かしいばかりの、純粹で、明るい、無垢な笑顔とともに。

.....

「……カノジヨ、ね」

僕は自分のアパートの通路を、彼女の台詞を範唱しながら歩いていった。

彼女は、その言葉をどんなニュアンスで使ったんだろうか。

……いや、もちろん今のは冗談だ。それさえもわからないほど、僕の頭はもうろくしていない。……たぶんね。

やはり、彼女は一般的でありながらも意味としては二次的な、ええい、つまりは「コイビト」

の意味で使ったのだろう。

「コイビト」？

いつから、僕と凜はそんな関係になったのだろうか。

出会った時から？ そんなはずもあるまい。

僕が初めて凜の家に上がったときか？ いや、あれはそんなニュアンスを持つ行為ではない。

いつの間に。

僕と彼女の間はこんなになっていたのだろうか。

僕はポケットから鍵を取り出そうとして、舌打ちした。スペアは渡してしまっただ。

仕方なく僕は財布の奥底から真鍮を引っ張り出し、鍵穴に突っ込み、そしてくるりとひねる。カシャン。

僕は電気もつけず、暗闇の中目の前に広がる畳に倒れこんだ。

「……ああ」

限界か？ 風は言っていた。僕も風の同類だと。

加賀峰凜が僕に注ぐ愛は、僕には少しばかり重過ぎる。

僕には、何も、応えられるような感情はないと言っのに。

でも、彼女にとってそんなことはどうでもいいのだ。

ただ、僕という人間に好意を抱き続けるだけで、彼女は幸せなのだ。そう、だから僕の精神は自らの存在を拒む。

このままでは、僕は、壊れてしまいかもしれない。

壊れないためにはどうすればいい？

そんなの、簡単だ。

元凶を、壊してしまえばいいのだ。

つまり。

僕が壊れる前に、加賀峰凜を壊してしまえばいい。

そうすることで、自分が壊れるのを防ぎうるのなら、僕はそうするだろう。

しかし、僕は未だに彼女を壊せないでいた。

自分を愛してくれる少女を壊せる人間など、存在しようか。

でも、もう、臨界地点はとうに越している。

彼女の重すぎる愛は、確実に僕の心を蝕み。

確実にその時は満ちてゆく。

加賀峰凜を壊さねばなくなる、その時が。

でも、彼女は、僕に壊されかけても、いや、殺されても僕のことを愛し続けるだろう。

無垢で、純粹すぎる彼女の心には、そんなことは小さすぎることなのだ。

僕が加賀峰凜を壊したとて、そこに何か意味が生じることはないのだ。

結局、彼女は僕に何をされようとも、僕の精神を蝕み続けるのだからうか。

愛の対義語、それは憎悪ではなく、無関心。僕にはそれしかないと言っのに。

「……全く、なんていう戯言だ」

僕は虚空に言った。

そうさ、こんなの、戯言でしかない。

矛盾だらけで、何の責任も負う気のない、冗談だ。

「ああ、そうだ、電話」

僕は携帯電話を引っ張り出し、凜の家にコールした。ワンコールもしないうちに、凜の声が響いてきた。

「あーよかった！みーちゃんじゃないか！無事に着いて何よりだよー。おねーさん安心ー」

誰がおねーさんだ。

「うふ、そんなのどーでもいいーの。とにかく、無事に着いてよかったよ。この三十分くらいがかがりんには五十三年分に思えました」  
んなおおげさな。

「ほんとだつてー。気が気じゃなかったんだよー」

そうか、心配させちゃってゴメン。と社交辞令を述べる僕。

「ゴメンじゃないでしょ。」

……ありがとう。

「どういたしまして。そんな素直なみーちゃんが、私は大好きなんだよ」

「僕も、そんな単純な凜が好きだよ」

それは、質量のない、誰にでも言えるような、空っぽの言葉だった。そんな僕の気持ちも知らず、あうー、という悲鳴が聞こえた。

「なんかフクザツー」

あはは、と笑い声が同時にもれた。その二つは、絶対に共鳴することのない、対極の性質を持つものだと言っのに。

「まーいーや、ありがと、みーちゃん。私は嬉しいよ。やっと、ここ

まで来れたって」

何のこと？

「うっん、なんでもない。ひとりごと」

電話の向こうで、にへらつと笑っている彼女の姿が浮かんできた。彼女のそういうところは、決して嫌いではない。嫌いではないけれど。

「んじゃあ、もうそろそろ私はお風呂の時間だから、お暇させてもらおうかなー」

ああ、もう十時半か。

「そうそう、後四十三びょう」

こいつは、やはり変なところで几帳面なのだ。

「うん、じゃあお休みー」

「お休みーちゃん。ぶいぶい」

ブツ。

ブツ、ブツ、ブツ、と鳴る携帯をしまい、僕は手を伸ばし、蛍光灯の紐を引っつかみ、指に巻きつけ、ゆっくりと引く。

闇よりもむしろ不気味にさえ思えるような、無機質な光が苦学生を連想させる何もない部屋を満たす。これは別にお金がないわけじゃなくて、ただの趣味である。なんていうのは負け惜しみ以外のなんでもない。

さて。

さりとてすることもないし。

寝ることにしようか。

僕はそのまま横にころころ転がり、敷きっぱなしの布団に潜り込む。何のために電気をつけたのか、僕はもう一度手を伸ばし、電気を消した。

僕は明日の講座は三時限目からだという事実を確認しながら、ゆるゆると眠りに堕ちていった。十時半になった。

「……うつ」

その声が、僕のものとは思えない、しわがれたものだと思ひ付き、そして僕は事態を悟る。

頭が痛い。のども激痛が走る。

立ち上がるうと試み、その試みは激痛の前に完膚なきまでに失敗することになる。

やばい。これはここ数年で一番危険な類の痛みだ。僕の感覚神経が危急を告げている。

時計をちらと見る。七時。あと一分と、二時間で目覚まし時計がなり始めることだろう。

自分の額に手をやる。おお、熱い。三十八度は下らないな、これは立てないし、だから薬も飲めない。くそ。

もう、いつそ寝てやろうか。

僕は目を閉じ、眠れない自分に気付いた。

さりとしてすることもないので、僕は携帯を出し、大学への連絡を図った。でももちろん僕が自分の学校の電話番号を入れるほど几帳面であるはずもなく、目論見は玉碎することになった。

仕方なしに、凜には悪いけどメールを送らせてもらうことにした。

『僕は今日、大学を休みます。先生によろしくお伝えください。』  
堅すぎる。

『みーちゃんは今日ガツコにはいけませーん、伝えといてー』  
軽い。自虐的だ。

五分ほどの思考の末ひねり出した文章は、

『僕は今日大学休むから、先生に伝えといて』



という無難な文章だった。忘れずに、寝てたらゴメンね、と件名に打つ。

送信、と。

送信してから、ものの三十秒で返事が返ってきた。

『なんでー？』

僕はしかたなく、本当のことをメールに打つ。

『軽い風邪さ、一にちやす』

そこまで打って、着信。フロム・加賀峰凜。あいつはメールが嫌いだといっていた。第一の理由としてはじれったいのだそうだ。アホ。『みーちゃん！風邪ってだいじょーぶ？』

つい五分ほど前まで寝ていたにしていはいふんとテンションが高い声が響いてきた。

「だめだか……ゴホ、ゴホ」

『あわあ、喋んなくていいよ』

なんか無茶苦茶言っている。

『あうー、喋らせちゃってゴメン、すぐそっち行くから』  
は？

「おいちょ……」

電話はすでに切れていた。

ゴホ、と僕は咳を漏らした。凜は、間違いなくこちらへ来る。今更何といっても、聞く耳があるはずがない、あの二つは飾りだ。舌打ちをし、布団にもぐる。

暇だ。

徒然なるままに、宇宙の神秘に思いをはせていると、ブラックホールって何だっけ？という疑問にたどり着いたあたりで、ガチャ、という音が響いた。続いて、 Bannon、と。

「みーちゃん！大丈夫？」

ブラックホールは霧散し、僕は布団から顔だけを出して、その声の主の顔を見据えた。

とりあえず手は振っておく。

「ああ、喋らないで」

どっちだ。というかどうかやって入ってきた。……ああ、昨日鍵を渡したんだ。

「まずこれ、おみやー」

そういつて袋を投げる。

僕が中を検分している間、彼女は僕の部屋に上がって、こちらへやってきた。さすがに、病人にダイブするほど彼女はアホではなかった。

ただ、おみやげとしてハーゲンダッツストロベリーを選んでくるあたり、やはりこいつはアホだ。

「あのね」

「あー、喋った！よかったー」

こいつは。

「それは買ってきたやつなんだよ」

変わらない気が……

気持ちの問題だよ、と彼女は一蹴した。

「そうだ、みーちゃん、熱計った？」

「まだ」

「なんで計んないのさー」

「動けん」

「そんなに悪いのー？仕方ないな。温度計、どこ？」

あ、あったー、という声が聞こえ、数秒で彼女が戻ってきて、口に突っ込む。一昔前のコントか。

「凜」

「はにゃ」

僕は口から温度計を出し、ティッシュで拭いてから然るべきところ

へ挟む。

「最近ほ、口じゃなくて脇に挟むんだよ」

「そうなの？」

そうなの、と僕は言う。うん。声がだいぶ楽に出るようになってきた。まだすごく痛いけど。

僕はハーゲンダッツのカップを開けた。なんだかんだ言っつて、僕はこれが大好きなのだ。

僕が食べ終わるのを、凜はうずうず待ち、やがて僕が食べ終わると、どこからか風邪薬を持ってきた。

「はいこれ、飲む」

「どうやって？」

「ゴクンって」

「違う。水、持ってきてよ」

うに、と彼女は了解し、あわただしく台所に消え、やがて水を持ってきた。

「ほいよー」

「ども」

僕は薬を飲む。にが。

「ふー」

凜はため息をついた。

「疲れたよ」

「うん、起こしちゃったからね」

「いやいや、もう起き掛けてたから」

こいつはいつもこういう。

「でも、カンビョーって楽しいかも。白衣の天使になるってのもいいかもね」

地獄の遣い魔じゃなくて？という突っ込みはしまっておくことにしよう。

とりあえず首肯だけする。

じょーだーん、と彼女は微笑む。

「ああ、そーそー。また昨日、一人殺されたつてー」

こいつは。

「また男か」

「そーそー」

彼女は嬉しそうに言う。

「もうこれは決まりかな」

僕は誰に言うでもなくそうつぶやいた。凜が首肯する。

「よりにもよって、そりやないだろうよ、凜」

「ん？」

「いや、なんでもない」

今までの九人の被害者の共通項。それは、被害者が全員、若い男なのだ。ティーンエイジャーの末年、十七から十八までに、凜は絞っているらしかった。

「だからさ、ちよつとかがりんは心配の現在進行形なんだよねー」  
なにが……そういいかけて、止めた。

「僕は大丈夫だって」

僕はそういった。そんなのは、真っ赤なうそ、戯言だというのに。

「うに、でもさ、やっぱ不安だよー。みーちゃんが殺された、なんていったら私泣くからね」

マジでこいつなら泣きかねない。感情表現が露骨な彼女のことだ、泣くときはそれこそ滝のように泣くだろう。うん、あまり見たくないな。まあ、見れないけどね。

「心配性だね、凜は。僕くらいの年齢の人なんて、ここいらにも車に積み栞で計るほどいるよ」

「よくわからないよ。それに、殺された人たちだって、たぶんみーと同じ気持ちだったと思うよ」

「大丈夫」

僕は強く言った。

そしてそれは、今までについたどのうそよりも悪性の強いうそだった。

「そう？わかった、じゃあ、もしみーちゃんが死んだらゴムマスクしてバレエのドレス着てひげダンス踊ってもらうからね」

「わけがわからない」

「うー、いいの。もういい、この話はおしまい。んでさ、この前、また面白いもの見つけたんだよ……」

そうして、会話は日常性を取り戻した。

凜の話に相槌を打ちながら僕は思う。

凪は、今何をしているだろうか、と。

十人目を殺しているか。

十一人目をつけているか。

どちらにせよ、時はたつ。

着実に、僕の最期の、その時は着実に近づいている。

人は、死を恐れるわけじゃない。

人は、無をこそ恐れるのだ。

常に無である僕にとつて、それはどうでもいいことだというのに。

僕は、普通に凜と笑いあっていた。

その笑顔に、連れて行ってもらいたかったこともあった。

光り輝く、人間の世界に。

でも、結局は戯言。

それ故の、欠陥人間。

そちら側へ行くのは許されない行為。

だというのに。

その笑顔は、僕を錯覚させる。

その愛は、僕を圧迫する。

そちらへ行けるかも知れないと言う幻想と、絶対に行けないんだという確信。

二つは相克し、そこに生まれるものは皆無。

一とマイナスイの総和が零であるように。

僕はゼロだ。

だからこそ、欠陥人間。

僕が死んだとき、彼女は何を思っただろうか。  
僕を心のよりどころとしている彼女にとって、  
僕の死は、

すなわち、彼女にとって一つの世界が崩壊する。

それは比喻でもなんでもなく。

ただ、当たり前のように零と一に還元され、物語が幕を閉じる。  
そこに残るものは。

ただの戯言なのかもしれない。

彼女の、愛は、やはり、重い。

その、まぶしい、笑顔は。

僕に、夢を、見させる、その、笑顔が。

僕を、崩壊へ、引きずり、込む。

僕、には、あまりにも、重、すぎる。

突然、湧き、起こる、破壊、衝、動。

この、ままじゃ、僕は、コワレ、る。

彼女を、いつ、か、コワシ、て、しま、う。

僕はあなたのことを愛せないから。

破壊衝動につながるから。

もう、これ以上僕を愛さないでください。

## 上 闇の開闢（後書き）

そもそも感情というものが生きるうえではまったく必要でないものと認識する考え方もこの世には存在します。その論によるとむしろ感情というものは邪魔者であり、人間はお互いを傷つけあってまで付き合う必要はなく、むしろ一人で生きていく生物だそうです。

それは、多少の馴れ合いはあってもよさそうですが、それ以上に深くなると、傷というものはついてしまうものなのです。

人と付き合う上で不可欠なことは、決断することです。その決断は、必ず傷を伴うものです。なぜそう決めたか、なぜこっちに決めなかったかのかと、ひとつの決断には常にもうひとつ、つまり他の選択肢を選ばなかった、という意味が付きまとい、必ずそれは人に傷を与えるものなのです。

その考えを元にぬらりくらりと生き続けるみーちゃん、そして現れる殺人鬼。さてどうなるか、乞う御期待、といったところでしょうか。

## 下 光の終焉

：

.....

夜の街を歩いていた。

ふと、人影が目に残まる。

向こうも、こちらを見る。

無視する。

でも、かまわず彼女は近づいてくる。

無視する。

彼女は、何かを言う。

何も反応できない。

彼女は話しかけ続ける。

けれど、どうしても何も反応することができない。

腹が立つてくる。

ナイフが、手の中にある。

これで、自らの首を掻く切るか。

相手の生命活動を停止させるか。

後者しか、選択肢はない。

その人は、何も反応しない。気付いているのに。

その人の背にナイフを突き刺し、突き刺そうとして、この人の髪を見た。

髪が長い。

それは、そう、加賀峰凜のように。

加賀峰凜。

加賀峰凜？

その人の顔を見る。その顔は、確かに、目を閉じた加賀峰凜のもの



であつた。

ナイフには、赤い液体がこびりついている。  
突き刺したつもりはなかったのに。

加賀峰凜は、もう動かなかった。

ふと、なにかの感情が巻き起こっていた。

それは、

怒りか。

悲しみか。

憤りか。

悲哀か。

充足感か。

不足感か。

相克する螺旋状の二つの感情が、僕を支配する。

相克螺旋の果てに見えるものは、常に皆無。

その二つは、

僕にとって。

……

答えは出ない。

ただ、時だけが過ぎていく、闇の中で。

立ち尽くし、頬に何かが一筋、走ってゆくを感じた。

……

ふと、目が覚めた。時計を見る。七時半。せつかくの早起きだったのに、今日は土曜日という失態。でもまあ、風邪はすっかりよくなつたようだ。

ち、と舌打ちをして携帯を手にする。時計表示を見る。七月二十一日、土曜日。

僕は体を起こす。一人下宿の大学生にとって、土日はすなわち睡眠

の日だ。しかし僕は土日に限って早起き属性を持っているため、一般大学生の責務に従事することができない。すなわちは、退屈。でも、退屈は嫌いじゃない。喧騒としたところに群れているよりもむしろこちらのほうが好きだ。

ばふつと布団に体当たりをかます。ああ、疲れてない。

退屈な僕の頭に、ふと、風の言葉が浮かんだ。

『十三人目に、あなたを殺す』

「もう九人目だったのにな」

どうして、こう、僕は平然としていられるのだろう。

「もっと生に対して執着しなさい」

自分にそう言っでは見るものの、誰も返事なんて返してくれない。

僕は僕にさえ無関心なのだから。

「そうだ、本」

僕は大学から借りてきた、広辞苑並みに分厚い本を鞆から取り出した。羅貫中、三国志演義。図書室にぶらりと出かけたら国語の先生に一方的に押し付けられたこの本、暇つぶしになることには間違いない。あるまい。

僕は本をぺらりとめくった。

.....

ジョンレノンの、イメージで目が覚めた。

目が覚めた？すなわち、僕は寝ていたのだ。僕の頭には件の本が載っている。

さて、なんで僕はイメージを聞いた？イメージ。それは僕の携帯の着信音である。すなわち、誰かしらから電話が来て。

ああそうか、電話だ。僕は慌てて携帯を開き、電話に出る。フロム加賀峰凜。

「もしも」

「みーちゃん？私！。風邪は大丈夫だよー。あのさー、三時から、暇だよー。じゃあ三時に迎えに行くから、用意しててねー、じやあバイ」

ブツッ。

「……し」

電話はそこで切れた。くそ。もしも言えなかった。一方的に言うだけ言って切りやがった。さすがだ。

さて、情報を整理しよう。風邪？治ったとも。三時から暇かだつて？それは全力で肯定だ。しかし、迎えに行くかと？ここに？どこに行く気だ？

ここで時計を見よう。二時十分。つまり一時間後には、僕はここにはいないわけだ。

準備、とか彼女は言っていた。何をしろと。

とにかく僕はパジャマを脱ぎ、服に着替えることにした。どこかに出かけるつもりらしいからね。

僕が首をかしげながら着替えている間に、時というのは無常にも確実に過ぎ去っていき、時計は二時半を告げていた。

「ふう」

僕はさつきまで枕にしていた分厚い本を手を取った。十ページまでしか読んでいない。我ながら根性がない。

よし、と気合を入れなおし、三国志演義、十一ページを開いた。目の前にインクが一定の法則に沿ってちりばめられたものの羅列が広がる。

それは少なくとも、三十分くらいなら十分に時間をつぶしうるものであった。

僕が、劉備が徐州太守になったあたりまで読んだところで、パタパタという足音、そして、ガチャリ、と鍵のまわる音がした。

「ちゃあー、みーちゃんお待たせー。あれ、何読んでんのー？わあ、三国志ー？みーちゃんが三国志だー。わーい。諸葛亮ってかっこい

いよねー」

臥龍はまだ出てきてない。

「そう？あの子が出てこないと話にならないよー。まーそんなのは  
いーや。早くいこー」

「どこに」

「デパートメントストアー」

さらりと。まぶしいばかりの笑顔で、彼女はそういった。

時計は、ちょうど三時を回ったところだった。

.....

彼女の話では、何か買いたいものがあるらしく、  
「一人じゃ寂しいから、みーも一緒に来なさい」  
との仰せ。

しかし、本当に欲しいものがあるのか疑わしくなるくらい、ショー  
ケースがある度に立ち止まっては「わー」だとか「うにー」だとか  
言っている。金は掃いて捨てるほどあるくせに、なかなか無駄遣い  
はしないようだ。骨董品集めで、それは十分なのだろうから、僕は  
何も言わなかったけど。

とにかく、それはどこの人でもやってそうな、平凡な買い物であっ  
た。つまりは、デートとか言う代物なのかもしれない。まあ、相手  
が相手だし、それは自意識過剰というものだ。

とにかく、僕は久しぶりに、普通の人間らしいときを過ごせた。

そして、ふと、こういうのもいいかもな、と思った。

思ってしまった。

.....

僕は、とある店の外で凜を待っていた。

「みーちゃんは外にいないとダメー」

とのこと。

「うし、おーいおっちゃん！おかいけー」

そんな声が聞こえたので、もうそろそろ出てくるだろう。  
なんとなく人ごみに視線を投げかけると。

ふと。

綺麗な顔が目に入った。

それはずっとこちらを凝視していたらしく、人ごみの中にいてもそこに百年前からいたかのような存在感をあらわにしている。

彼女は何をするでもなく、黙ってこちらへ歩いてきた。

「ひさしぶり。買い物？」

彼女 美渚凧は、僕に、凧とはまた違う笑顔で話しかけてきた。

「うん、まあそんなものか」

「そう」

彼女は興味なさそうにつぶやいた。

「順調か？」

僕はそうとだけ言ったけれど、彼女はしかと了承した。

「ええ。あなたに行くまで、あと二人かしらね」

一人増えた。

後、二人、か……。

「あのね。もうちょっと反応したらどうなのよ？つまらない」

「僕は自分にさえも無関心だからね」

「死のうが生きようが？」

「多分、ね。その時になつてみないと分からないな。そのとき抱く感情が、後悔か、充足感か……若干知りたい気もするんだよ。自分が、この世のことを本当はどう思っていたのかを」

「自分で自分がわからないのね」

「それが僕のアイデンティティーさ」

「よくわからないわ」

「僕も」

「……ばかみたい」

凧はあきれたようにそう言った。

「……でもね、少なくとも、あの長い髪の子は悲しむでしょうよ。それでもあなたのことを好いていてくれるんだから」

「分かってるよ、それくらい。何度も本人から言われてるしね。」

そう、と凧は言った。

「あなたは、あの子のこと、好きじゃないの？」

凧はそう言う。

好きか、だって？

確かに凧は、僕に大きすぎるほどの愛を注ぐ。それは決して母性本能から来るものではないということも承知している。

それなのに。

「……別に。そう言うわけじゃ、ないよ」  
「……じゃあなんで一緒にいるの？」

「……楽しいからね」

「あの子の隣にすることが、でしょう？」

そう、あくまで隣なのだ。

「そうかもね」

「……あなたは選ぶことが嫌いなようね」

「そうかもね」

「もう。よくそれで、あんな天然な女の子とやっていけるわね」

「凧はことが細かかろうが大きかろうがかまわず無視する人だからね」

「ミッチーの比喻表現は分かりにくいわ」

凧に言われるとは。

「そう？でもね、何よりも悪いのは無関心なのよ？」

それは聞いたことがある。愛情の対義語は、憎悪ではなく、無関心。古くから使い古された言葉だ。

「まあね」

「好意でも悪意でも、抱かないのかしら。もう少し彼女に思いやり

を持つたらどう?」

「思いやり、とは」

「……もういいわ」

凧はあきれをさらに重ねた。

「とにかく、もう少し命を大切にしなさい」

「君がそれを言うか」

僕の命を奪う予定の殺人鬼が、それを言うのか。

「まあ、そうね」

彼女はあっさり引き下がった。

「確かに今のはばかげた話かもね。……じゃあ、そろそろお暇させてもらおうかな」

そう言つて、凧は僕の肩越しに何かを見ていた。ふと後ろを見ると、凧がニコニコしながら立っていた。

「じゃあ、ね。もう一度言うけど、経済学のレポート提出は来週末でだから、もう忘れちゃダメよ」

どうやら凧はなかなか人に気遣いのできる人らしかった。普通の友達同士としてなら申し分のないお人だろう。

変な誤解を招かぬように、あくまでクラスメイトであるように装う。僕もじゃあ、と言っておいた。

「ああ、凧、ゴメン、待たせて」

「いんや、待たせたのは私のほうだかんねー。さて、かがりんはおなが空きました。どこかで一服入れましょーよ」

彼女は、明るくそう言った。凧のことなどどうでもいいらしい。

「了解、どこがいい」

彼女はすぐそばにあったファーストフード店を指差した。そうだ。凧はジャンクフード嗜好者だった。

僕らは連れ立って中に入り、バリユーセットを二つ頼んだ。ハンバーガーにドリンク、ポテトつき。合計千五十円ナリ。

さすがファーストとは名ばかりではなく、感心するほどの速さでセットを持ってきた。(いや、それは意味が違う) 凧がハンバーガー

にむしゃぶりついているのを、檻の外から愛護動物を見ているような感覚で見つつ、ポテトを口に運ぶ。

「ねーみーちゃん」

「ん」

「今日はありがとねー」

「いや、目的の物は買えた？」

「うん、ばっちり。でき、もしかして、今日、何の日か分からない？」

「七夕」

「当に過ぎたよ。あう、ホントに分からないんだー」

凜は面白そうに笑う。そんなこと言われても、何も思いつかない。

「うに、じゃあ思い出させてあげよー」

そう言つて、凜は綺麗に包装された箱を突き出してきた。

「どうしろと」

「みーちゃんおたんじょーびおめでとー！ハッピーバースデイトウー  
ユー！！」

「僕の誕生日は二十一日だよ」

「七月二十一日土曜日でございマース」

あれ、そうだったんだ。自分でさえ忘れていた。

「とにかく、これ受け取りなさい」

「ありがと」

僕は袋を開けた。スペードのキーホルダーだ。

「ひよつとして、さつき買つてたやつか？」

「あつたりー。ほらほら、私のハートとペアなんだよ」

そう言つて嬉しそうな凜の手には、ハートのキーホルダーが握られていた。

「ありがと」

僕は繰り返した。

「いーのいーの」

そう言い、ハンバーガーを三口で食べる凜であつた。



「みーちゃん食べ終わったね？よしや、じゃあお会計してきまーす」  
「待った、自分のは自分で払う」

「だーめ、今日はみーちゃんのバースデーだもん」

そう言つて凜は僕の制止した。そういわれると僕はどうしようもなく、おとなしく外へ出ることにした。程なくして凜も出てくる。

「ほじゃ、今日のイベントは大成功つてことで。もう帰ろーか」  
時計を見ると、すでに六時半という。

.....

「帰りは歩こうよ」

とのことで、僕は河川敷を歩いていて。夕陽はとうに沈み、空は蒼から赤、紫を経て、そして黒へとなつていった。

うにー、暗いよーと言いつつ凜は手を絡ませてきた。拒否するのもナンセンスな話なので好きにさせてやることにしよう。

「あのさあ、現在って何だと思う？」

唐突に凜はそういった。

「曖昧だね。でも、刹那刹那のことを指し示す単語ではないと思うよ」

「私もそう思う。例えばさ、今、私とみーちゃんはここを歩いている、これ現在。でもさ、気がついたらここにいたわけじゃなくて、みーちゃんと約束して、デパート行って、買い物して、ハンバーガー食べてつていう歴史があるから、今というものがあるんだよね」

「それは未来についても言えそうだね」

「そーだね。未来がなければ、現在なんて概念は芽生えないからね。そもそも人類進化の原点は、時間意識の発現にあると思うよ。例えば、ここに一人の原人がいたと仮定するよ。その子は全く蓄えのない「現在」の自分に気付いて、このままでは餓死してしまう「未来」を思い、一人では成功しなかった「過去」の狩を思い出して、仲間と一緒に狩に行く。こうして社会が出来上がっていつて、その過程

で欲望が生まれて、進化街道まっしぐら、と。」

「まあ、そういうことだね。もしかしたらさ、現在つてのは自分の意思が介入しうる唯一無二の現実のことを言うんじゃないかな」

「といいますと？」

「だからさ、過去には自分の意識なんて介入の仕様がないじゃん？未来なんて言語道断、だから、過去を踏まえつつ、未来に向けて何らかのアクションを起こしうる、合流地点ともいうべき場。それが、現在のなかもね」

「うん。そうだね、『合流地点』かあ。新しいね」

「新しいだけだね」

あはは、と楽しそうに笑う凜。

視界に、何かが入った。

何か。姿はまだ捉えられないけど、それが何なのかは感覚で分かった。

暗くなりかけてきている道の傍ら、転がっているモノ。

それが、無機質名アスファルトの地面にたたずんでいた。

「凜」

「うに」

僕は指をゆつくりと持ち上げた。

「あれ、見えるか」

凜がそちらを向き、そして楽しげな表情が一変する。凍りついた。

「……見える」

「行くか」

「しかないね」

僕は自然、早足となる。

日はすでに没し、街灯が頼りない明かりを漏らすのみである。そこにたどり着くのに、そう時間はかからなかった。

「うわ……」

凜が柄に合わず驚愕……いや、そんな言葉では言い表せない、言う

なれば決して起こらないと信じていた悪夢が現実になった、そんな感じだ。

「ひどいね」

僕は割合、ショックは小さいほうだった。もっとも、凜もそれほどのショックを受けているわけではないと思う。凜の精神構造は、かなり強い。

ただ、この現場の悲惨な光景に圧倒されているだけのようには思える。辟易、その表現が、一番正しいのかもしれない。

その死体の顔は、けれど安らかで、やっぱり苦しまなかったんだろうなあ、と思う。

すでに生命活動を停止したそれ。肉片という言葉が頭をよぎった。その表現が適当だろう。生命活動を停止した時点で、それは物体であるという事実のみしか残ることのない。

しみじみと、人間とは、所詮有機物の塊でしかないということを感じさせる瞬間であつた。

「うにー、さて、何を呼ぼうか。警察かね？」

「だろうね、救急車なんて呼んでも意味なんて微塵にも劣るね」

「よっさー」

そう言つて、凜は携帯を取り出した。

「あれー、日本の警察って117だっけー？」

時間を聞いてどうする。

「110だよ」

ういつす、と言つて携帯を耳元に運ぶ。

僕は改めて現場を見直して、ふと、頭に変な思いがよぎった。

凜。お前はこんなことをしていたのか？

何をしているんだ。もっと他にもやることあるだろうに。

首筋には一筋の赤い線。これが致命傷だろうが、血はあまり出ていなかった。

鋭い刃で切られた瓜は、その鋭さゆえに、切られた直後に切り口を合わせると元に戻ってしまうと言う。そこまでもないけれど、ま

あそれに近いものだと思う。

彼女の綺麗な笑顔と、この惨たる有様は、けれどかけ離れていると言っわけではなかった。

これで、十一目か。

あと、一人。

人間は、死ぬる時節に死ぬがよく候。

僕は死ぬときに、何の未練も、何の文句も言わずに消えてしまふのだろう。

自らの死を、第三者の死としか受け取れない、欠陥人間である僕にとって。

死後とこの世界の違いを見出すことは難しいことであるから。

ただ、僕が死んだら、凜はどうするのだろうか。

ふと、そんな疑問が頭をよぎった。

「すぐ来るってよー」

凜は少しこわばったものの明るい声でそう言った。

「そうか」

僕はそう言うのみだった。

.....

僕らは、事情聴取を少し受けてから、現場を警官方に任せ、そこを後にした。

「いやあ、あそこまで安らか死に顔な死体は初めて見たよー」

「そう何度もお目にかかりたくはないものだよね」

「まーねー。でもまあ、たぶん……というかほぼ間違いない、あれは件の殺人犯と同じ人だよね」

凜は硬く笑う。

「まあ、まずそうだろうね」

「……この分じゃあ、まだ増えるだろうね……」

凜はぼそりつつばやいた。

「みーちゃんがやられないといいんだけど」

「大丈夫さ」

ごめん。嘘です。

「そう?」

凜は心配そうに僕の顔を覗き込む。少しだけ、ほんの少し、心にちくりときた。

「じゃー私はこの辺でさよならなんだよ」

「そうか、じゃあ」

「ばはーい」

そう言つて凜は無邪気に手を振る。

無防備な笑顔。

明け透けな笑顔。

僕は目をそらし、早急に家へと向かった。

.....

「ふう」

僕は書き終えた経済学のレポートを見直し 本当にあつたのだ。というか、忘れていた。同じ学校でもないのに、偶然だといいいんだけど 鞆にしまった。

「..... お腹空いたな」

僕は冷蔵庫へ歩み寄るが、小腹にちょうどよいものは何も入っていなかった。

「買いに行きますか」

今日はまだ夜の散歩をしていない。あの日以来、僕は夜の散歩を嗜好するようになった。散歩がてら、コンビニへ。合理的。まだ十一人目だし。

僕は財布を手にし、玄関を出た。

生ぬるい風邪に気持ち悪さを感じつつ、すぐそばのコンビニエンス・ストアに向かう。

暗い道を歩くと、否応無くあの日の夜を思い出す。今から思えば、あの時の僕はどうかしていたのかもしれない。

「あれ」

後方に何かを感じた。

さつと振り向き、影が電柱の陰に入った。

風ではなさそうだ。彼女はあんなに露骨ではない。独学のプロフェッショナル・キラー。それが彼女のアイデンティティーなのだから（意味不明だ）。だとしたら、誰か。

まあいい。とられるものなんて命しかないわけだし、その命も風に奪われる予定なのだ。

コンビニに入り、適当なお菓子と菓子パンを購入。そして雑誌コーナーへと歩いてゆく。適当な漫画雑誌を手に取りページを開く。目を一瞬漫画に落とし

そして、外を見る。

「ッ……。」

黒いコートを身にまとい それはいつも通りか いつもはつけてないはずの、つばの広い帽子をかぶり、髪の高い少女がそこに立っていた。

加賀峰凜。

僕は雑誌を棚に戻し、外へと出た。うわ、暑い。クーラーと熱帯夜の温度差攻撃なんて卑怯極まりないぞ。

僕が歩き出し、少ししてから凜らしい人も僕を追う。

僕は、無視することにした。

やがてアパートへとたどり着き、僕はドアを閉めた。台所のほうへ行き、ドアと同じ方角にある窓を開け、外を見た。

髪の高い少女が、ここが見えそうな位置に立っていた。足元に水筒を持参するあたり、結構大物なのかもしれない。

「ふう」

僕は窓を閉めた。

彼女の精神構造は単純なのだ。

彼女にしてみれば、たぶん、僕が殺人鬼に狙われるかもしれない、  
と思ったのだろう。彼女は僕が夜の散歩を嗜好しているのを知って  
いる。それを阻止するため、見張りに来たと。

あのな。

「……寝よう」

僕はコンビニで購入したものを食べることも忘れ、布団へもぐりこ  
んだ。

………

「……ふう」

私はそんなため息をついた。

暗い街を、頼りない電灯が明るくしている。正直怖い。暗闇でない  
だけまだ救いかもしれないけど。

……のどが渴いた。足元に持参した水筒を口元に運ぶ。口内に麦茶  
が流れ込む。うん、やっぱり麦茶だね。

用済みの水筒を足元に置き、みーちゃんの部屋の監視を続けた。勘  
の鋭いみーちゃんのことだ、もう私が見張っていることなんて気付い  
ているかもしれない。でも、私はこうせずにはいられない。

こんなことしても、何も意味ないことは分かっている。みーちゃん  
が、自分の存在をそう思い込んでいるように。

「でもね、みーちゃん」

意味の無い存在なんて、存在しないんだよ。みーちゃんは自分の存  
在を無価値、無意味だと思っているけど、そうじゃないんだよ。

私は、みーちゃんがいてくれるだけで嬉しいから。

みーちゃんが私に何も抱いていなくなつて、構わないから。

だから、死のうなんて思っちゃダメ。

そのためにわざわざ外で散歩するなんて、止めてよ。

殺人鬼。

私はあなたのことを知らないし、あなたは私のことを知らないだろうけど、一つだけお願い。

もしあなたがみーちゃんを殺そうとしているのなら、止めてください。

もしどうしても殺したいなら、私を殺してください。

彼がいてくれるだけで、存在し続けるだけでも私は嬉しい。

彼の死は、私の世界の一つの崩壊と同義なのだから。

世界の崩壊は、すなわち精神崩壊なのだから。

お願いだから。

.....

私はナイフを引き抜いた。

それは「うつ」と言った数瞬の後動かなくなった。

開いているまぶたを閉じる。

少しだけ、苦しませてしまったかもしれない。

とにかく、これで一二人目。

「ああ」

十三人目。

ミッチーの我関せずオーラ満載の顔を思い出した。

正直、どうなんだろう。

あの人は。

自分が殺されることをどう思っているのだろうか。

凜、と彼は呼んでいた。

凜が、彼の死でどれだけ傷つくか、彼はわかっていない。

でも、そんなのは、たぶん関係ない。殺すときは殺す、苦しませないように。それが私流。

私は乱れた服のすそを直し、月明かりに照らされ、そこを後にした。

私は、いつまで暴走を続けるのだろうか。

もしかしたら、私は求めているのかもしれない。



誰に？  
何を？

でも、例えそうだったとしても、それはそれでいいのかもしれない。  
何が？

何で？

答えなんて後付なものはいらない。

その時、事実として受け入れればいいのだ。

ふと、そんなことを思ってしまった。

「……情けない」

感傷なんて、久しく忘れていたと言っのに。

朝が来る。

.....

僕は十時に覚醒した。

だるい体を起こして、台所へ向かう。窓から外をうかがうが、さすがにそこに凜の姿は無かった。

と、お腹がご飯を食べるのだ、とうるさく告げた。ぐぐう、と。

「ああ、しまった」

昨日何のためにコンビニへ行ったのだろうか。せつかく買ってきたものを、食べるのを忘れて寝てしまった。

まあいい。予定としてはすでにそこに無いもの、つまりは得だ。

僕は少し得した気分になりつつ、菓子パンの袋を開けた。

それはあつという間に腹の中へ消え、お菓子も瞬殺。

さて。暇だ。

三国志に手を出そうと思ったが、ふと気になることがあったので本屋へ行くことにした。

.....

「あ……」

僕は思わずそんな間抜けな声を出してしまった。  
今、僕は本屋の雑誌コーナーにいる。情報雑誌を手に、そこに佇んでいるというわけだ。  
さて、僕の間抜けな声の要因となったのは、次のゴシック体の羅列である。

『連続殺人事件、十二人に』

もう十二人か。十三引く十二は、一。  
次は僕。

まだ二日はあるかな、と思っていたのに。  
リミットは切れた。

時は満ちた。

…なのに、何も感じなかった。

ただ、事実として受け入れただけ。

受け入れた？

受け入れたのか？

僕の心からは何も帰ってこなかった。やはりこいつは僕にさえ無関心なのだ。

『もう少し、自分のことを大切にしたらどう？』

そんな風の言葉が古来する。

「ふう」

全く、なんていう、戯言だ。

僕は雑誌を購入することにし、早々とそこを後にした。  
どこに行こうかなんて考えてもいなかったけれど。

でも、僕の足はどうやら凜の家へ行きたがっているようだ。  
大人しく従ってやろう。

たまには、最期にはこんなのもいいかもしれないから

.....

チャイムを押したけれど、返事は無かった。

「二時まで寝ているなんて、あいつらしくないな……」

そんなことをぼやきつつ、凜からもらった鍵でオートロックを解除する。

エレベーターを経由して凜の部屋まで行き着き、チャイムを押したけれど、やはりうんとも言わなかった。

僕は首をかしげながら鍵を突っ込む。かちり、と小気味いい音が響き、ドアは開錠した。

「おじゃま……」

と、言わないんだった。凜いわく、お邪魔じゃないからそんなこと言わないの、らしい。あいつは日本人の謙譲の風習を何だと思っているのだろうか。

廊下を通り、僕は凜の寝室兼私室に入る。

と、スー、スー。そんな規則正しい吐息、すなわち寝息が鼓膜を震わせた。

僕が五人は横になれそうなベッドを見ると、真ん中あたりにちよつとした小山ができていて、頭だけがひょこつとでていた。

「……。」

なるべく音を立てないようにして凜のほうへ向かう。

安らかな寝顔。こんな寝相がよいとは思ってもいなかった。起きるときにはベッドから落ちてさらに反転している族の一員だと思っていたのに、五分前に布団に入っただけのよう、そんな寝相。

むにー、とほっぺたを伸ばしてみたい衝動に駆られたが、僕の理性は何とかそれをこらえた。

仕方ないので普通に起こしてやることにした。

ぺち、ぺちとほっぺたをたたく。『普通』という判断基準は人それぞれだ。

「りんー、起きろー。暇だー」

「うに」

反応あり。

「僕だー、りん。おーい……」

「うにー。……あれ、みーちゃん？なんでここに？と言っかここ私ん家？のようだね。あれ？ホワイアーユーヒア？なんだよ」  
「なんかよく分からない。」

「お前らしくもない、寝坊だよ」

「へ？今何時？」

「二時」

「あー寝過ぎしたー。しかたない、昨日は遅かったもんで」

「そうだったね。何時くらいまであそこにいたの？なんて露骨なことは聞かない。こいつはこいつなりにがんばっていたのだ。」

「そうか」

「そうだけ言った。」

「あれ、ていうかなんでみーちゃん？」

「暇だったから」

「適当にそんなありきたりな言い訳を口にする。」

「ホントに！？わはお、すごいや！みーちゃんが特に何の理由もなしにここ来たー！」

「この瞬間が天然記念物！ビデオビデオ。撮影開始なんだよ」

「凜はこの三十秒でテンションを一気に最大×三分の二にまでもっていきやがった。これ以上のテンションを、こいつは十二時間以上も維持し続けるのだ。こいつのタフネスは、僕も学ぶ点があるかもしれない。」

「はいこれ、おみや」

「そういつて、僕は凜に雑誌を渡す。凜は興味深げに雑誌を引っつかんだ。」

「……ついに、十二人目か」  
「そんなことを凜は言った。」

「やっぱり、スタイルに変更はないね。頸動脈切断によるショック死。ただ少し、苦しんだ後がうかがえるね」

そこまでは気がつかなかった。死体の顔写真は こんな写真を出しているのだろうか、と疑問に思ったほどのアップ写真、確かに若干歪んでいたようだ。

「でも、まぶたは閉じられてるね。少し、犯人に心の乱れがうかがえるかな」

凜はいつから心理学者になったのだ。それに、風が心を乱す理由なんて思い当たらない。

「でも、やっぱりターゲットは変わらず青年かー。みーちゃん、頼むから死んでくれるなー」

頑張ってみるけど。

「よし、……おはよー！さわやかな朝だね！」

そういつて、彼女はがばと起きた。黒いコート、昨日と同じ。寝るときくらい脱げて言っているのに、こいつはこれだけには聞く耳を持たない。

「寝癖治して、顔を洗おう」

「もー、やあだよ。めんどい」

まあ、言うだけ言っただけだ。やるなんて天地がひっくり返っても思わない。

そして、これからは特筆すべきことなど何もない、ただの雑談に時を費やした。

すぐ先に、そんなことが控えているなんて気にもせず。

ただ、すこし、まあ、うん。

もう少しだけ、こういう時間があっても、よかったかもしれない。もう少しだけ、こうして凜と話していたいのかもしれない。

けれど、そんなのは所詮戯言。

そんなものはやがて零と一に還元される、無駄なこと。

失うようなものは、作らなければいい。

互いに傷ついてまで続けるような関係は、断ち切ってしまえばいい。

形あるものにはやがて終わりが来る。

精神はやがて無に帰する。

簡単に、精神なんてものは崩壊する。

それは、必ずしも死だけによるものではない。

だから、僕は感情を捨て、彼女は自分のうちに占める感情の割合をより大きくした。

やがてなくなるものを捨てるか、わかっていてなお使い続けるか。

そこが、彼女と僕の、決定的な違いだった。

結局彼女は針の上の安定を手にし、僕に訪れたのはただの戯言。

無関心は、加賀峰凜の愛を受け自我の崩壊を促した。

壊すか、壊れるか。

結局僕は何も決断せぬまま、誰かに決められた崩壊の道を手に取った。

愛されなかったというのは、生きなかったのと同義である。そんなニーチェの言葉があるが、愛さなかったことは、果たしてどうなのだろうか。

そついう意味では、多分、僕は生きていたのだろう。

ただ、愛さなかっただけで。

加賀峰凜。そのあけすけな笑顔は、僕を所詮行くことのできない光の夢を見せる。

手を伸ばせばそれだけ遠くなり、手を伸ばさなければそれだけ近くなる蜃気楼のようなそれは、違いを見せつけながら僕を圧迫し続ける。

感情を捨てた僕は、ひとつ余計なものまで捨ててしまった。

それは、自我。

自らを客観的に見つめ、社会集団の一員としてみなすこと。

それが多分、僕に圧倒的に足りない。

だから僕はこつも無関心で。凜はああもあけすけでいるから。けれど、それがうらやましかった。

そんなことは、断じて、ない。

ただ、僕は知りたいただけなのかもしれない。

自分にすら無関心であった自分の死に際して、何を抱くかというのを。

凜を、自らの肉体を失うことで、僕が凜にどんな思いを抱いていたのかということ。

もし僕が、僕でも凜でも凪でもない、ただの傍観者であつたら、僕をこう評すだろう。

『死に際して自らを知ろうとする欠陥人間』と。

けれど、僕が今抱いているものは何なのだろうか。

死にたいわけじゃない。

生きたいわけでもないけれど。

どちらでもいいし、どちらでも大して変わらない。

生きるきっかけがあれば生きるし、死ぬきっかけがあれば死ぬだけだ。

ただ何かが来るのを待ってから、そこへふらふらと歩み寄っていくだけだ。

拠所を捜し求める、夢遊病者のように。

何もしない。ただ自分に降りかかるうとすることのみを受け入れる。自分の存在の醜さを見せ付けられてしまった、あの日。

抗いはしない。

そんな行為、当にやめた。

それさえもめんどくさい。

無関心ゆえの無感動。ただ死ぬきっかけがなかったから、自殺するなんてめんどくさいし、かつこ悪い気がしたから死ななかったただけの話。

死に直面し、自らを知ろうとする欠陥人間。

要は、抜け殻なんだ。

なんだ、そんなの欠陥どころじゃない。

……失格だ。

そう、人間失格。

僕はそれを深層心理の中で理解していたから、今こうしているのだろうか？

失格者は生きないほうがいい。  
生きるだけで迷惑だから。

結局は、やはり戯言なのだ。

「さて、暇はつぶれたし帰るよ」

僕は凜にそう言った。

「そう？じゃあ気をつけてねー」

案外あっさりと彼女は引いた。

僕は部屋を出るとき、凜に向かっていった。

「そうだ、凜はいい子だね」

「見た目からして百パーセント、善人でしょー」

彼女はそう囁く。

「いい子は、夜に出歩いちゃだめだよ」

「あう」

硬直する凜。

「どーうしたの？急に……さあ？」

明らかに動揺が見える凜。

「いや、別に。なんでもないんだけどね」

「変なみー」

明らかに安堵がうかがえる凜。

「とにかく、今日も来るの？」

「あうう、なんのことさあ」

なんか可哀想になってきた。

「ごめん、ほんとになんでもない、戯言」

「うー」

じゃあ、と僕は凜に別れを告げた。凜は答ええないかな、と想像していたら

「じゃねーっ」

と打って変わって元気になった。山の天気もここまで露骨には変わ



るまい。

僕は凜の部屋を出る。

「……さて」

でも、ここにきたことだって、全くの無駄じゃなかったようだ。ひとつ、大事なことを思い出せたから。

とにかく、僕は凜のマンションを後にした。

.....

外はすでに暗くなっていた。

僕は窓から外の様子をうかがう。

「……やっぱりいるか」

電柱の影、加賀峰凜はそこにいた。

仕方ない。やっぱり凜は純粹だけではないようだ。

僕は首を振って、外へ出た。

影がさつと動く。僕は無視し、できるだけ悠々と下へ降りる。

「ふう」

生暖かい風が皮膚にまとわりつく。日本の夏特有の高温多湿な夏は、夜にもその爪あとを残していく。

その最要因たるアスファルトを足蹴にしつつ、僕は何も考えずに歩き出した。

.....

今日はずいぶん歩く。

私はみーちゃんの背中を追いかけてながらふと思った。

そう、今日のみーちゃんはなんかおかしかった。

まるでこれから死地へ赴く入隊したての兵隊のような、そんな拳動不審。

昨日が特別なのか、今日が特別なのか。いや、そんなことはどうで

もいい。

私が恐れていることは、彼が殺されてしまうこと。考えるだけで、気が狂いそうになる。

ただ、彼の存在だけをよりどころにしていた私にとって。彼の死は、私の精神死ともつながるのかもしれない。

私がそこにいたところでどうなる、なんて考えてもいなかった。

.....

ずいぶん歩いた気がして、ふと意識を招来すると、僕は土手に立っている自分を発見した。

「疲れた」

言いつつ、ちらと後ろを伺う。凜らしき人影が目に入る。

僕は、不意に走り出した。

なぜこうするのか、自分でもわからない。理性では到底感知し得ない要因。

後ろから足音がしたが、やがてそれは遠いものとなった。

僕は走るのをやめ、後ろを伺った。そこに凜はいない。

「ああ、そうか」

僕は一人、つぶやいた。

走り出した理由。それは、凜だけは巻き込んではいけないという深層心理。

そして、ここは。

「.....」

あの橋だった。

僕は橋の下へと歩みを進めた。

生い茂った草を踏みつつ、光とはまったく無縁、橋の下へとやって

きた。

「なんで、ここにいるの？」

しばらくして、後ろから声が聞こえた。続いて、カラン、と。

僕は答えなかった。

「あなたも困ったものね。そんなに殺してほしいの？」

僕は口を開いた。

「さあ、わからないよ。気がついたら、ここにいた、それだけだ。死にたい、なんて思ったことないわけじゃないけど、そう多くはない」

「生きたいとは？」

僕は首を振った。

「死ぬのも億劫だし、自殺なんてかつこ悪いしね」

だから、今僕は最高にかつこ悪いのさ、と自虐気味に言った。

「女の子は、悲しむでしょうに」

ああ。

「確かに、そうかもしれない。悲しんでくれるかもね。でもまあ、うん。ただなんとなく。いや、ただ、自分が死ぬときにどんな気持ちを抱くのか、それは楽しみかもね」

「可哀想だわ」

「そうかい」

「あなたなんてどうでもいいの、欠陥人間さん。でもね、女の子はどうなるの？彼女にとって、あなたは唯一の拠所、それなのに」

「知っているような口を」

「知ってるわ」

つけてたもの、しばらく。そう彼女は言った。

「そうかい」

「あら、ミッチーに限った話じゃないのよ？今まで私が殺した人た

ちはみんなつけていたわ。殺さなかった人たちも、けどね。私は、我慢できないのね。何も目的がなくなただ生きてる。死にたくないから、零か一の二択だから、とりあえず一、生を選ぶって言ういい加減な人がね。まっとうに生きてくても、生きられない人もいるのに」

彼女はそう言うとし少し哀しそうな目で僕を見た。

「私は、その中の一人なの。生きてくても、まっとうに生きられないって、言うね。話したっけ？私の家は、それなりの名家だったの。お金もあつたし、父も母も優しくかつたし。それなのに。こんなありさま……」

少し以外だった。

暗い過去。

触ってはいけない傷。

そんなものが尻にあつただなんて。

何かを求めて。

乗り越えようとして。

彼女は今、ここにいます。

乗り越えるのがいやだからここにいます、弱いもの。

「……それは僕だ」

尻に聞こえないようにつぶやいた。

「さて、お話はおしまい。そろそろ、約束を果たそうかしらね」

そういつて、気がついたら尻はナイフを持っていた。

尻は、悪戯っぽく微笑んだ。もし場面が違ったなら、五人中四人は心を射抜かれそうな笑みだった。ちなみに、その一人は僕である。

「最後に一言。あなたにとって、あの女の子 凜さんは何だったのかしら？」

「ハッ……」

僕にとって、凜とは、だと？

畜生。

なぜ、それを今まで一度も考えようとしなかった？

凜にとっての僕は。

僕にとって、加賀峰凜とは。

何なんだ？

幼馴染。いや。

「あら、考えたことなかったんだ？ふふ、残念。もっと、早く気づいてたらよかったのにね」

その声は、風に消えた。

ふっと。僕はよけた。

「なんでよけるの？あなたは死にたいんじゃないくて？」

友達。違う。

「あら、もしかして死に直面して、やっと生きたいって思った？」

親友。ふざけるな。

「もう少し、早く気づけるとよかったわね。でも、まあ遅いね」

彼女。彼女？いや、違うだろう。

風が疾走する。風よりも早いんじゃないかと思う速さに、僕は対抗する術を持たない。

気がつくと、僕は風に組み伏せられていた。

ナイフが、高々と掲げられる。

「じゃあ、ね」

加賀峰凜。

いつも隣にいて。

いつも隣にいてくれた。

いつも隣にいて、無邪気で、嫉妬するくらい無防備な笑顔を咲かせていた。

それは心を、

蝕み。

壊して。

和ませて。

生きる意味。存在の証明。

……そうだ。

「ああ、そうか」

「みーちゃん!!」

刹那。

甲高い声が、静寂の空間を切り裂いた。  
ふと、そちらに目をやる。

髪の長い少女。

小柄で、子供みたいな十九歳。

加賀峰 凜。

「……なんで」

僕の唯一の願いさえも、神は聞き入れてくれなかったのだろうか。  
しかし、当の凜は、こちらを見ていた。暗いのに、よく僕の顔が見えることだ。いや、彼女の目には、僕しか目に入っていない。

凜なんて、網膜に映ってすらいないだろう。

「ああ、よかった……」

そんなことを言った。

暗い中。

暗いところが苦手だと言っていた彼女。

心因的な恐怖は、時に自らを崩壊させるほどにも強力であるらしい。

こんな暗いところに。

すくむ足に鞭打って。

高鳴る心臓を押さえつけて。

ただ、僕のためだけに。  
と。

僕の上の少女は、さっと凜のほうを向いた。

高々と掲げられていたナイフが、凜のほうへと向いた。

そう、彼女は 凜は、殺人鬼だったのだ。

「……やめ……」

乾いた唇。下はもつれ、うまく言葉を紡がない。

畜生、こんな時に。

凜が、殺人鬼が、ナイフを構え、何も知らずに安堵している凜へ突進する

「止める!!」

凜の首筋の寸前、凪の腕がぴたりと止まった。凜は何が起こっているのかよくわからないような目で、ぼうつと僕のほうを見ている。自分があと少しで殺されるなんて、考えてもいないだろう。

「そいつのことが、好きなんだ」

僕は知らず、そんな言葉を言っていた。

これが答えだ。

僕にとつての凜。

凜にとつての僕。

それは、

幼馴染じゃない。

友達じゃない。

親友でもない。

恋人でもない。

ただ、

かけがえの、ない存在なのだから。

「……だから、殺すな」

殺す、という言葉に反応して、凜がようやく事態を察知したようだ。うにっ!と悲鳴を上げるが、そこから動こうとはしなかった。

と、凪の肩がふるふると震え始めた。

怒っている? いや、違う。

「ふふ……あはははははは!!」

笑っていた。さもおかしそくに、体をくねらせ……はしなかった。

「はは……あー、面白い。殺そうと思ったけど、止めた。白けた。

とんだ茶番ね。全く。でもまあ、あなたみたいな人からそんな言葉が聞けただけでも十分ね」

そんなことを言うと、今度は彼女は凜のほうへ向き直った。

「ごめんね、彼氏さんに。でも、いい物を見させてもらったわ。いいことも教わったしね。

……凜さん、だっけ」

いい人ね。うらやましい。

そんなことを風は言う。ナイフを鞘に収めると、どこに行くでもなく歩き出した。

「……ああ、みーちゃん」

硬直していた凜の意識が戻ってきた。

ぱたぱたとこちらへ近寄ってくる。

僕ははまだ地面に伏したままだったので、腕を支えに起き上がる。

「みーちゃん、ほら、手」

凜は、手を差し伸べてきた。

小さな手。

細い、華奢な手。

僕は、無言でその手をとった。

よいしょ、と立つ。

「さて、と」

「帰ろうか」

そうだね、と僕は言った。

それ以上、言葉は何も要らない。

どちらからともなく、二人は手を絡ませていた。

.....

カラン、カラン、カラン、と。

下駄の音は、いつまでも夜の街に響いていた。



## 下 光の終焉（後書き）

僕は街にいた。

待たされるのには慣れている僕には、一時間くらいの遅刻は無に等しい。

あれから、どのくらい経ったろうか。少なくとも、一週間は経った。……この街を賑やかしていた連続通り魔は、十二という数から先へ行くことはなかった。嘘のように、ぱったりと姿を消してしまったのだ。

でも、そのほうがいいのかもしれない。

何かを求めていた彼女。

それを見つけられたのなら。

ふと遠くへ目をやると、白いワンピースを着た加賀峰凜が目に入った。今日は珍しく、黒いコートは着ていなかった。

僕の姿を見つけると、うれしそうに手をふる。

僕もとりあえず手をふり返す。

けど、その心には虚無しかなかったわけではない。きちんと、不安だとか、焦燥だとか、そして希望だとかも収まっていた。

でもまあ、今日は最後のしめる割合が多いかもしれない。

第二回加賀峰凜アンド僕の買い物フェスタ。

僕はそちらのほうへ歩んでいく。

ふと、横を見る。

そして人ごみの中に、僕はきれいな顔をした和風の少女を見出した。偶然、運命、奇跡。そんなのを信仰する僕ではないけれど、とりあえず今回は信じてやってもいい気分になった。

彼女は、もう一人ではないようだ。柔和な顔立ちをした少年と一緒にいた。

これも何かの縁だ。僕は目礼をし、彼女はにこりと笑う。そして、僕は視線を戻す。

手をふり続ける、加賀峰凜へと。

太陽は燦燦と輝いて。

風はそよそよ吹いていて。

気候は温暖、天気は晴天。

僕と凜は、どこぞへ向かって歩き出した。

その手を、固く、結んだままで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8739e/>

---

光と闇のハザマ～Faulty Person～

2010年10月9日04時19分発行